

徒然草・序段

竹 村 信 治

（広島大学）

つれづれなるまゝに、日ぐらし硯に向かひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそ物狂ほしけれ。

平成二〇（二〇〇八）年三月告示の小学校学習指導要領で「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新設され、その下で編纂された国語教科書に掲載されて以降（東京書籍五年上・教育出版六年上・三省堂六年。光村図書は五年に一〇九段「高名の木登り」、三省堂は六年に末尾二四三段「八つになりし年」を採録）、『徒然草』序段は、小学校・中学校・高等学校で繰り返し学ばれる教材となった。この序は、

これは無聊をもてあましている人間が書き綴ったたわいない文章であると卑下した序章。

（新日本古典文学大系・脚注）

と理解されている。しかも、それは、たとえば荒木浩『徒然草への道―中世びとの心とことば』（二〇一六年六月、勉誠出版）がこれ以上は望めないほどの博搜をもつて示すように、「心に思うままを書く草子」の序・跋の伝統のなかでものせられた、「常套としての謙辞」（同書）でもあった。

こうした序段を、児童・生徒は小学校・中学校・高等学校で繰り返し学ぶ。その意義を、私たちはどのように理解しておけばよいのだろうか。それを考える材料を、荒木前掲書を足掛かりにして、以下に提示しておく。

*

『徒然草』序段は、一五世紀半ばに歌人清原正徹が評したとおり、「おもふりは清少納言が枕草子の様」（『正徹物語』上74）で「枕草子をつぎて書きたる物」（同下22）、特に、『枕草子』跋文との語彙の重なりが多く（目に見え心に思ふ事を）「つれづれなる里居のほどに、書きあつめたるを」「あやしきを、こよやかにやと」「つきせずおほかる紙を書きつくさんとせしに、いと物おほえぬ事をおほかるや」「ただ心ひと

つに、おのづから思ふ事を、たはぶれに書きつけたれば」はづかしきなんどもぞ見る人はし給ふなれば、いとあやしうぞあるや」、『徒然草』序段への影響関係が露わである。すなわち、『徒然草』序段は、『枕草子』から、抽象的かつ一般的な部分のみを抜き取ったかたちで成っている。」(荒木前掲書、三三頁)

また、荒木前掲書は、近世古注(黒川由純『徒然草拾遺抄』、契沖『鉄槌書人』)の指摘を手掛かりに『源氏物語』との語彙の重なりにも着目し、「つれづれなるままに」(葵帖)、「日を暮らし」(同)、「硯に向かひて」(手習帖)、「そこはかとなく書き」(夕顔帖・夕霧帖・明石帖)を摘出して、「作者の脳裡に去来したイメージや情趣」(福田利徳『徒然草』の虚構性)『国語と国文学』一九七六年六月号)の由来を『源氏物語』に窺っている(第一章七、八)。

そして『古今和歌集』序の、

やまと歌は、人の心を種として、万の言の葉とぞ成れりける。
世中に在る人、事、業、繁きものなれば、心に思ふ事を、見るもの、聞くものに付けて、言ひ出せるなり。

あるいは『和泉式部集』八二五番詞書、

いとつれづれなる夕暮れに、端に臥して、前なる前裁どもを、
ただに見るよりはとて、ものに書きつけたれば、いとあやしう
こそ見ゆれ、さはれ人やはみる、小さき松に(歌、略)

また、『同集』一八八九番〜一八九一―番詞書(松井本)、

つれづれなりし折、よしなしごとにおほえしことも書きつけ
しに、世の中にあらまほしきこと

夕暮れはさながら月になしはてて やみてふことなからま

しかば

おしなべて春はさくらになしはてて 散るてふことなから

ましかば

みな人を同じ心になしはてて 思ふ思はぬなからましかば

こうして、『徒然草』序段は『古今和歌集』に始まる(やまとことば)の言述の作法を「抽象的」にたたみ込んでいる。したがって、小学校で、中学校で、高等学校で、学習指導要領の指示に従い「古典に親しむ」目標に向けて制度的に繰り返し行われるこの序段の音読・暗唱は、学習者を(やまとことば)の伝流(伝統的な言語文化と国語の特質)に繰り込み、馴染ませ、解釈に必要な状況モデルを獲得させる。隠れたカリキュラム Hidden Curriculum(潜在のカリキュラム)なのでもあって、そこにまずは繰り返し学ぶ意義を認めることになろう。

*

『徒然草』序段は、序・跋の「常套としての謙辞」として、しかも『古今和歌集』以来の常套的語彙を「抽象的かつ一般的な部分のみを抜き取ったかたち」で成る。けれども、差異がないわけではない。

その一つは、序でありながら執筆の契機や経緯にかかわる事情説

明（『枕草子』跋における、定子からの料紙下賜のごとき）がなく、「見る人」（読者）への顧慮（『枕草子』跋における、「はづかしきなんどもぞ見る人はし給ふなれば」のごとき）も明示されていないこと。荒木前掲書はこの点を取り上げて次のように述べる。

これは、類似性の中で際立つ重要な相違点だ。『徒然草』は、他者の圧力や外部の要請、さらには自身を取り巻く環境さえ、明示的には執筆の弁明とはしていない。純化された「つれづれ」の中で、どこからともなく彼を突き動かす「心」によって書かれようとする。

（三九頁）

また、

それはもはや、一人自らと対峙してなされる、自照的な執筆行為や、あるいは遺言と、殆ど相重なっている。そして密室的な個人性が純化すればするほど、述作は「他人」にとってはかぎりなく反古に近づく。著述する自らに於いても、所詮は筆のすざび、もしくは手習と同じだと、韜晦されることになるだろう。

（四六頁）

さらに、

兼好の孤独は、より自覚的に充足している。キーワード「つれづれ」を用いて、『徒然草』は象徴的な物言いを残していた。

つれづれわぶる人は、いかなる心ならん。まぎるる方なく、ただひとりあるのみこそよけれ。（七五段）

こう語る兼好は、『徒然草』を「ただひとりある」ことの自足の中で書く。自在に独り居て、独り綴り、「反古」として消費されていく文字言語。彼がなぞらえた「手習」という〈型〉は、『徒然草』にとつて、いみじくも相応しいものであった。（二二頁）

かくして序段は、「謙辞」ならぬ「韜晦」のうちに自らの著述を「手習」と言明する言述である。「他者」「外部」と切れた「純化された「つれづれ」の中で、「密室的な個人性」を「純化」させ、「孤独」の「自足」のうちに、「どこからともなく彼を突き動かす「心」によって」書かれ、「消費」される「手習」。しかし、そのようにして自らを「手習」になぞらえてみせる序段は、その「手習」との差異もあわせ持っている。「心にうつりゆくよしなしごとを」。これは「手習」の〈型〉の常套を逸している。

「手習」に詠まれ書かれるのは「古今和歌集」序の「心に思ふ事」をはじめとして「思ふこと」である。『枕草子』はその影響下に「目に見え心に思ふ事」と記し、『和泉式部集』一八八九番〜一八九一番詞書には「よしなしごとにおぼえしごと」とあつて、その具体は「世の中にあらまほしきこと」だった。同集八二五番詞書には「前なる前裁ども」（絵・歌）もあるが、多くは「心に思ふ／おぼゆる／うちおぼゆる／おほしき／浮かぶ／思ひある／うごく／思ひ出づる」ことであつて、それらは「心にうつりゆくよしなしごと」ではない。『徒然草』のそれは、

筆を取れば物書かれ、楽器を取れば音を立てんと思ふ。(中略)
心はかならず事に触れて来る。仮にも不善の戯れをなすべからず。
(一五七段)

ある大福長者の言はく、「(中略) 所願心にきざすことあらば、我を滅すべき悪念来れりと、堅く慎み恐れて小要をも成べからず。(中略)と申しき。
(二一七段)

虚空、よく物を容る。我等が心に念々のほしきまゝに來り浮ぶも、心といふもののなきにやあらむ。心に主あらましかば、胸の内にそこばくことは入來らざらまし。
(三三五段)

すべて、所願皆妄相なり。所願心に來らば、盲心迷乱すと知て、一事をもなすべからず。
(二四一段)

と同様、心を念々の「來る」場と見なした上で、所思の「手習」ならぬ所思の發生、遷移、つまりは心の動きを捉え、見つめつつ、それをそのままに「そこはかとなく書きつく」「手習」なのである。荒木前掲書はこれを「心を静めつつ心の動きを観察することを果たす方法」(同、一六三頁)と評している。

こうした「手習」を可能とした「心」なるものへの洞察には、同時代的な認識論、とりわけ宋学や禅学が取り組んだ問題領域の浸潤が認められるわけだが、「禅学的な心の分析に明らかに足を踏み入れつつ、何故かその手前で逡巡し、宋学的文辞をものして疑問を呈しているようにもうつる」(荒木前掲書、一五九頁)それは今さて措き、この「心を静めつつ心の動きを観察すること」を果たす方法」として「手習」の由来を、ここでも『源氏物語』に窺っておく。

手習などするにも、おのづから、古言も、もの思はしき筋にのみ書かるるを、さらばわが身には思ふことありけりとみづから(イ身ながら)ぞ思し知らるる。
(若菜上帖)

女三宮降嫁を控えて懊惱する紫上は、「筆を取れば物書かれ」の「手習」のなかで、「事に触れて來」り「書かるる」「古言」の觀察の内に「さらばわが身には思ふことありけりとみづからぞ思し知らるる」自己省察にいたる。

同様のことは、浮舟をめぐっても確かめられる。

思ふことを人に言ひつづけん言の葉は、もとよりだにはかばかしからぬ身を、まいてなつかしうことわるべき人さへなければ、ただ硯に向かひて、思ひあまるをりは、手習をのみたけきことに書きつけたまふ。

「亡きものに身をも人も思ひつつ 棄ててし世をぞさらに棄てつる

今は、かくて、限りつるぞかし」と書きても、なほ、みづからいとあはれと見たまふ。

限りとぞ思ひなりにし世の中をかへすがへすもそむきぬるかな

同じ筋のことを、とかく書きすぎびあたまへるに……

出家翌日の浮舟の「手習」である。ここでも「手習」は、「他者」「外部」と切れた「密室的な個性」のうちで「思ひ」の「あまるを

り」の営みとしてある。そして、書く「事に触れて来」る「今は、かくて、限りつるぞかし」との自己省察。さらに、その書記の披見は「いとあはれ」の感懐を呼び起こし、その中で、「手習」は、「同じ筋のこと」を廻って「心にうつりゆくよしなしごと」を「書きすさぶ」¹¹「そこはかとなく書きつく」自律運動へと浮舟を誘っていく。

他者への顧慮に由来する「謙辞」に重層した「密室的な個人性」に由来する「手習」の作法。その「手習」の人（書く主体）への作用を『源氏物語』の紫の上、浮舟に確かめつつ、そこに「心」なるものへの自らの洞察を合わせて発見される、「心を静めつつ心の動きを観察する」場としてのエクリチュール。序段はそうした自らのエクリチュールの位相を言明する言述でもあった。

さて、こうして『徒然草』序段における「謙辞」「手習」の伝統との差異を確かめるならば、末尾「あやしうこそ物狂ほしけれ。」もまた、別物として理解されるのではないだろうか。

「あやし（う）」は、先の挙例にもあるように、「謙辞」の序・跋、「手習」の常套である。「物狂ほし」も、『枕草子』跋の「いと物おほえぬ事ぞおほかるや」等に類比的だ。しかし、「あやし（う）」と「物狂ほし」とが連語ではなく係助詞を中においた修飾関係をなすのは常套ではない。しかも、「あやしう」をもって強調される被修飾語「物狂ほし」は、その原イメージ「物狂ひ」をめぐって、間もなく「思ひ故の物狂ひ」が「憑き物」の「物狂ひ」から切り分けられ（『風姿花伝』『物狂』条）、「いかにも物思ふ気色を本意に当て、狂ふ所を花に当て、心を入れて狂へば、感も面白き見所も、定めてあるべし。」¹²同上とメタ化され、真似られ、演じられることになる、そう

した境位になぞらえられる心状語でもあった。「思ひ故の物狂ひ」、それは「源氏物語」若菜上帖の紫の上、手習帖の浮舟に含意された姿でもあろう。となれば、彼女たちの「手習」を真似ぶそのエクリチュールの実践の帰結たる「物狂ほしけれ」も、常套の「謙辞」に重層する「密室的な」「手習」が誘う心意と読めないわけではない。

*

以上、序・跋に常套の「謙辞」とされる序段について、「常套」との差異を点検した。見てきた差異は、このテキストの言語主体が「常套」¹³他者のことばを学び、なぞり、その「いま・ここ・わたし」においてこれと向き合うなかで出来させたものである。いわゆる「伝統的な言語文化」はこうして「伝統」との対話を通じた「伝統」の更新ともにある。繰り返し取り上げられる『徒然草』序段は隠れたカリキュラムばかりでなく、また見てきたような、「念々のほしきままに来たり浮かぶ」場としての「心」、そうした「心の動きを観察する」エクリチュールの位相、そのはての「物狂ほし」き心意など、兼好法師の心をめぐる体験に加えて、こうした更新ともにある「伝統」なるものの学びにも開かれている。

※本文引用文献は以下の通り。ただし、表記に改めた所がある。

- ・ 日本古典文学大系（岩波書店）：『正徹物語』・『風姿花伝』
- ・ 岩波文庫（岩波書店）：『和泉式部集』（旧版）
- ・ 新編日本古典文学全集（小学館）：『源氏物語』
- ・ 新日本古典文学大系（岩波書店）：『古今和歌集』『徒然草』・『枕草子』